

## 〔課題演習抄録〕

# 自律的な読者の育成を目指した文学的文章の指導について －「読みの観点表」の作成と活用を通して－

碓 文 果

Fumika IKARI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：高等学校国語科，文学的文章，読むこと，「読みの観点」，計画的指導

## 1 研究の目的

本研究は、文学的文章において自身が選択的に読みの観点を選択する、つまり自律的に読み味わうことのできる読み手の育成を目標とする。

文学作品は、作り手の作意に合わせて文体、構成、舞台装置や人物設定、情景描写や色彩などが複合的に絡み合っただ自の世界観を織りなす芸術作品である。しかしながら、現状において学習者自身が自由に、読み方を意識しながら文章を読める状況になっているかという点については疑問が残る。文学的文章に対する意識調査（2017年6月中学生対象）を実施したが、その回答にも、「楽しみ方が分からない」「授業でも結局答えが決まっているので自主的に借りて読むことはない」等の回答が得られ、文学作品の読みに楽しさを見いだせていない状況が明らかになった。こうした原因の一つは、国語の時間における文学的文章の指導方法にあると考える。一般的に云われる課題として、心情読解をはじめとする教材内容の読み取りの指導に偏りがちなことが挙げられる。そういった指導が多い原因の一つには、指導者自身が受けてきた授業の影響により、読みの観点が指導者の中でも曖昧であること、あるいは、入試において心情読解が求められることが考えられる。その結果として、学習者は文学的文章には多様な読み方があることを知らないまま文学作品とは疎遠になってゆくという実態が生まれていると推察される。

そこで本研究では、文学的文章を自律的に読み味わえる読者の育成を目指し、多様な読みの観点到に着目する。その際、先行研究として示された二瓶が作成した「読みの観点表」を参考資料として、系統的・計画的な育成を目指した学習指導について追究する。

## 2 研究の計画

時期	研究内容
M1	・国語科教育課題の把握 ・先行研究 ・実態把握(アンケート, 授業観察)
M2 前期	・「読みの観点表」一次案作成 (読みに必要な観点を先行研究等から抽出して作成)
M2 後期	・作成した一次案に基づいた授業実践 ・「読みの観点表」二次案作成 (読みの観点表, 年間指導計画に修正を加えて作成)

## 3 研究の内容

## (1) 先行研究を基にした一次案の作成

「読みの観点表」とは、文学的文章における視点を明確化し、学習者に系統的・計画的に指導するために筑波大学附属小学校教諭の二瓶(2006)が作成したものである。本研究の一年次では、二瓶の「読みの観点表」を用いて観点表の一次案を作成した。その一部を〔表1〕に示す。今回作成した一次案と二瓶作成のものの相違点は以下の通りである。

二瓶作成の「読みの観点表」は小学校段階を想定しているため、①物語の構成、②時の設定、③場の設定、④人物、⑤あらすじ、⑥語り、⑦主題の7つの観点で構成されている。本研究の一次案では、更に多様な読みができる中学校、及び高校までを視野に入れ、二瓶作成の7つの観点に加え、作者性や物語の原典、時代背景といった観点も加えて作成した。更に、〔表1〕に示した観点については読者論をはじめとする先行研究に基づいた定義づけも行っている。読者論とは、読者を中心とした文学理論の総称である。

【表1】 「読みの観点表」一次案(硯2018)

① 物語の展開や登場人物の配置関係、心情の変化などについて、細字を添えて捉えること	② プロット	③ 人物・心情	④ あらすじ	⑤ 主題	⑥ 視点・語り	⑦ 情景	⑧ 作者との関連
(1) 物語の展開や場面の移り変わりを意識しながら読むことができる。	① 物語に添えて場面と場面、登場人物などをつなげて、内容を解釈する。	(1) 登場人物の相互関係			(1) 「視点人物」という捉え方を知る。		
(2) 文体の与える表現効果捉える。	② 文章の構成や展開、表現	(2) 行動、感情、表現、人物関係など			(2) 「視点人物」の		

## (2) 一次案を基にした授業実践 I

一次案に基づく授業実践 I の概要である。

実施日	平成 30 年 1 月 24 日(水), 31 日(水)
場所	福岡県内公立中学校第 1 学年
教材名	中原中也「月夜の浜辺」
主眼	読んで感じた印象や、場面の展開、心情の変化などについて、作品中の描写を根拠にして捉えることができる。
提示した読みの観点	① 構成・リズム ② 舞台装置(時・場) ③ 人物の言動・心情 ④ 作者との関連 ⑤ 小道具 ⑥ 音 ⑦ 題名 ⑧ 色彩

授業実践 I では、多様な読みの観点を取り入れたいという指導者の思いが強く、学習者の学習状況を勘案せずに、いきなり多くの観点を提示してしまった。そのため、学習者の処理すべき情報が多くなってしまった。こうした課題を踏まえ、指導者の意識を明確にするためにも、「読みの観点表」の二次案の作成と授業への対応を工夫することとした。

## (3) 「読みの観点表」二次案の作成

二次案の作成にあたっては、学習者の理解のしやすさや、意図的・計画的な指導ということを意識し、「ネーミング術語」(糸数 1996)の視点等も参考にした。その一部を〔表 2〕に示す。

【表 2】 「読みの観点表」二次案(硯 2018)

① 物語の構成	② 時・場・人の設定(=プロット)
文学的文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めること。(知識及び技能 1)ウ	語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈すること(読むこと 1)イ
文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えること。(読むこと 1)ア	※場面設定_文学的文章における状況や舞台の作られ方のこと。(時代設定、人物設定、名前など)
※種類 ○文学的文章の種類_散文:小説・随筆・紀行文・日記	○物語全体を通して「時」がどのくらい経過したのかが分かる。

## (4) 二次案を基にした授業実践 II・III

二次案に基づき 2 つの授業実践を行った。学習に段階性と学習者の状況の把握が必要と考え、学習者の状況調査から定める観点を、それぞれ一つに絞った。事前アンケートの結果、いずれの学習者にも、既存の観点が③心情に著しい偏りがあり、⑦情景が少ないことがわかった。そのため情景描写や色彩に着目させやすい『蜜柑』と『トロッコ』という教材を選択し、⑦情景を観点とした。授業実

践 II は中学 3 年生を対象に平成 30 年 7 月に、授業実践 III は中学 1 年生を対象に 12 月に実施した。

実践 II と III からは同様の成果と課題が得られた。成果として、事後アンケートに、今後使ってみたい観点が③心情だけでなく様々に分散したことが挙げられる。また「色に注目して読んだことがなかったけど新鮮でよかった」等の視点の広がりが見られる感想が得られた。一方、自律的な読者を育成することが本研究の目的であるにもかかわらず、観点を指導者から提示することにより、窮屈で強制された読みになっていたことが学習者の様子などから課題として挙げられた。

## 4 成果と課題

本研究では、文学的文章を自律的に読み味わうことのできる読み手の育成を目指し、授業の在り方を模索した。成果は次の 2 点である。まず自律的な読みを可能にするための「読みの観点表」を独自に作成したことである。次にそれを活用した授業を実施し、その結果から、教材の特性と着眼点(観点)と学習者の学習状況という 3 つの要素がマッチングするように構成し、段階的に読みの観点を集積させていくことの必要性を捉えたことである。一方、課題としては、本研究において学習者に観点を提示することは出来たが、学習者自身が自分の読み方を選択したり振り返ったりすることまでは出来ていないことである。これでは、真に自律的とは言えない。今後は、「読みの観点表」の二次案を基にし、学習者に地図や表といった形で提示しながら、学習者が自分で読み方を選んだり自分の読み方を確かめたりする機会を持たせることが求められる。

本研究を行った自身の成果として、独自の「読みの観点表」の作成に取り組むことにより、あらためて読みの観点の多様さを知ることが出来たことが挙げられる。また、文学的文章における自由な読みを実現するための長期の目標(年間指導計画)と短期の目標(観点を焦点化した単元)という見通しを持つことが出来た。

## 主な引用・参考文献

- 西郷竹彦 1963 「国語科構造論〈統合科〉としての国語科教育の三機能説」『日本文学』12 号  
田近洵一 1993 『読み手を育てる一読者論から読者行為論へ』 明治図書  
糸数剛 1996 『「ネーミング術語」による読みの授業』東京法令出版  
二瓶弘行 2006 『夢の国語教室創造記』東洋出版